

全国学力学習状況調査の分析

国語の成果と課題について

【成果】

A：「情報の扱い方に関する事項（知識・技能）」において、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができています。

B：「読むこと（思考力・判断力・表現力等）」において、文章全体の構成を捉えて要旨を把握し、目的に応じて、文章と図表を結び付けるなどして必要な情報を見付けることができています。

【課題】

A：「言語の特徴や使い方に関する事項（知識・技能）」において、学年別漢字配当表に示されている漢字を文章中で正しく使うことに課題があります。

→新出漢字の学習の際は、意味調べやその活用例（例文）についての学習活動を設けたり、学習した漢字は使い書き表したりすることを大切に、新出漢字や既習漢字の定着を目指していきます。

B：「読むこと（思考力・判断力・表現力等）」において、目的に応じて、文章と図表などを結び付けながら、必要な情報を見付けて自分の意見や考えを書きまとめることに課題があります。

→目的や条件に応じて文章を書くことに苦手意識を抱いている児童が多くいることが予想されます。目的や条件に応じて文章を書きまとめる力をよりつけるために、事実と感想（意見）の区別、引用を用いた表現方法の定着、定型文の提示をもとに文章の構成を考える学習活動を設け、書き慣れることを大切にしていきます。

【書く目的に応じた書く条件の例】

★意見文（提案）

①自分の立場を決める。 ②理由を文章（新聞）から引用し、根拠を明確にする。

★推薦文（提案）

①物語を要約し、その物語のすばらしさを述べる。 ②理由を文章（新聞）から引用し、根拠を明確にする。

★意見文（感想）

①自分の感想を述べる。②理由を文章（新聞）から引用し、根拠を明確にする。

C：文章の記述問題において無解答率が高かったので、文章の読み取りや、設問の理解等に時間が多くかかった、もしくは、問題が難しく解答することができなかったことが予想されます。

→児童質問紙において、多くの児童が書く問題等に対して、粘り強く取り組んだと回答しているものの、無回答率が高いという結果になりました。目的や条件に応じて文章を書く経験を課題Bと同様に、等を書くことに慣れる学習活動を設けていきます。

算数の成果と課題について

【成果】

- A:「数と計算（知識・技能 及び 思考・判断・表現）・データの活用（知識・技能）」において、棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができています。
- B:「数と計算（知識・技能）」において、小数の加法で数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉えること、異分母の分数の加法の計算をすることができています。
- C:「変化と関係（知識・技能）」において、伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができています。

【課題】

- A:「データの活用（思考・判断・表現）」の領域について、目的に応じて適切なグラフを選択して項目の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて説明したり、書きまとめたりすることに課題があります。
- 目的に応じたグラフは選択していても、根拠となる数値を読み取れなかったり、設問の趣旨の理解が不十分であったりすることが推測されます。児童にとって数学的事象が想像しやすいように、各学年で児童の発達段階に応じた実生活の中にある数学的事象（校内のケガ調べ等）を取り上げ、数値の増減の変化からどのような様子が言えるか、その理由や根拠を明確し、数学的用語や数値を用いて説明したり、書き表したりすることができる課題設定の工夫を大切にしていきます。
- B:「数と計算（思考・判断・表現）」の領域において、分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述することに課題があります。
- 分数の通分の処理は理解していても、 $1/4$ や $2/3$ が、もとにする数の $1/12$ のいくつ分であるかについての理解に課題がありました。各学年で児童の発達段階に応じた実生活の中にある数学的事象（円型のケーキ分け等）を取り上げ、小数や分数のそれぞれの定義や表し方の違い、利便性についての理解をより深めることができるように課題設定の工夫を大切にしていきます。
- C:「数と計算（知識・技能）」の領域において、数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることに課題があります。
- 数直線上で指定された点の値が、1をもとに何等分したうちのいくつ分かを求めることに課題があります。各学年で児童の発達段階に応じた実生活の中にある数学的事象（数直線上の値を分数と小数の両方で求める課題等）を取り上げ、分数は常に1を基準としそれを何等分にしたうちのいくつ分であることを表していること、小数は1を任意数（0.1や0.01、0.001等）を基準とした表し方であることの理解をより確かなものにできるように課題設定の工夫を大切にしていきます。
- D:「データの活用（知識・技能）」の領域において、示された情報を基に、表から必要な数値を読み取って式に表し、基準値（100%）を超えるかどうかを判断することに課題があります。
- 百分率10%は、0.1倍であることは理解していても、百分率110%は、1.1倍であることについての理解に課題がありました。各学年で児童の発達段階に応じた実生活の中にある数学的事象（割引した金額や増量した量の変化を求める課題等）を取り上げ、実生活中に割合の概念が多く活用されている利便性に気づき、割合の定義、もとにする量・比べられる量の意味についての理解を深めることができるように課題設定の工夫を大切にしていきます。

理科の成果と課題について

【成果】

- A：「地球を柱とする領域（思考・判断・表現）」において、赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができています。
- B：「粒子を柱とする領域（思考・判断・表現）」において、「水は温まると体積が増える」を根拠に、海面水位の上昇した理由を予想し、表現することができています。

【課題】

- A：「エネルギー・粒子を柱とする領域（知識・技能）」において、身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識の定着に課題があります。
- アルミニウム、鉄、銅について、電気を通すか、磁石に引き付けられるかなど、それぞれの金属の性質理解に課題があります。実験等を通して、実体験をふまえた理解を児童が得ることができるようになっています。
- B：「生命を柱とする領域（思考・判断・表現）」において、植物の種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、説明したり書きまとめたりすることに課題があります。
- 植物の種子の発芽の結果から見いだした新たな課題や疑問について説明したり書きまとめたりすることに課題があります。児童にとって身近な自然現象や事物を比較し、その差異点や共通点を基に新たな問題を見いだすことができるように、実験結果から友だちと意見交換する学習活動を計画・意図的に設け、差異点や共通点を基に、新たな問題や疑問を見だし、説明したり書きまとめたりする学習活動を大切にしています。
- C：「粒子を柱とする領域（思考・判断・表現）」において、水の温まり方について、問題に対するまとめを導き出す際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、説明したり書きまとめたりすることに課題があります。
- 現象の発生理由を明らかにするために、実験方法の手立てやその適正を考えたり、実験結果から考察したりすることに苦手意識がある児童が多いことが無回答率の高さからも推測されます。身近な自然・科学的事象の発生のメカニズム等を取り上げ、児童の興味や関心を引きつけながら課題把握・観察・実験・結果からの考察をする学習の流れを大切にしています。

児童質問について

【全体を通して】

本校は「友だち関係に満足している」「学習中の友だちとの意見交換が楽しい」と回答する児童が多く、児童が安心して学習することができる環境が学校全体で整っていると考えられます。これからも学力の基盤を支えている要因としての「基本的な生活習慣・学習習慣」と「家庭学習」の確立と習慣化に加え、「児童が自分で学習を調整する力」の向上や「ICT機器の活用」についても全学年で声をかけ合い取り組んでいく必要があることが児童質問紙から読み取れました。

【良いところ】

- ・「友達関係に満足している」と回答した児童の割合は、全国や県平均と比較すると上回っており、本校の児童の人間関係の安定が見られました。
- ・多くの児童が「いじめはどんな理由があってもいけない」など当てはまると回答するなど、高い規範意識が見られました。
- ・「人が困っている時は進んで助ける」と回答した児童の割合は、全国・県平均と比較すると上回っていました。

【課題】

- ・「算数や理科を学習することが好き」と回答した児童の割合が全国や県平均と比較すると下回っていました。算数や理科だけではなく、各教科で学習したことが実生活に役立つことや、課題探究の面白さを児童が感じることができるように学習計画や授業展開の工夫に努めていきます。
- ・読書量の減少が懸念されます。読書時間の確保、よむよむラリーの推奨、ブック紹介カードの作成等、学校での読書活動をより一層充実させていきます。
- ・「困りごとや不安がある時に、先生や学校の大人にいつでも相談できますか」の質問項目では、「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」と回答した児童の割合が2割程度いました。今後も学校全体で教育相談の体制をより一層充実させていきます。